

## 〈影〉との再会

—『ノルウェイの森』における「永沢」の意味—

影山 諒

—

『ノルウェイの森』（一九八七・九、講談社）において「僕」は、なぜこの物語を語るのでしょうか。「僕」自身の言葉によれば、彼は「直子との約束を守るために」、つまり彼女のことを忘れないでいるために、「この文章を書きつづけている」のだという。しかし、直子に向けられたはずの物語は、次のように締め括られる。

僕は受話器を持ったまま顔を上げ、電話ボックスのまわりをぐるりと見まわしてみた。僕は、今ど

こに、いるのだ？ でもそこがどこなのか僕にはわからなかった。見当もつかなかった。いったいここはどこなんだ？ 僕の目にうつるのは、はいずこへともなく歩きすぎていく無数の人々の姿だけだった。僕はどこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた。（第十一章）（傍点ママ）

例えば木股知史が「この一節の時制は、「僕」が緑に電話をかけている、一九七〇年の十月のある日という現在だ。でもそれは、手記を書き終えつつある「僕」の現在に波及してくる」と指摘しているように（一）、ここに引用した言葉は、物語を語る三十七歳

の「僕」のものとしても解釈できる。とすれば語り手は、「緑を呼びつづけ」ることで物語を終えていたことになる。だが、この物語は直子に向けて語られていたのではなかったか。仮に「僕」が、「直子との約束を守るために」のみの物語を書き進めていたのだとするならば、こうした物語末尾の一節をどのように捉えれば良いのであろうか。なぜ「僕」は、直子に向けられた物語を緑への呼びかけによって締め括っているのか。冒頭の「僕」の言葉と末尾の一説は食い違っている。

このずれを考えるためには、明かされなかった物語の空白、末尾の一節から物語冒頭までの時間について考察する必要があるだろう。物語は一九七〇年の十月までしか語られず、そこから冒頭までの「せいぜい二十年ぐらい」という時間は、ほとんど沈黙されたままなのである。だがこの物語の意味とは、沈黙を守られた二十年という空白にこそ、秘められていたのではないか。そして直子が死んでしまった以上、テキストから浮かび上がる空白の二十年間に隠された「僕」の過去とは、〈緑との過去〉であったと考えられるのだ。

本稿ではこうした沈黙を掘り起こすことから、〈緑との過去〉を想起させるに至った原因、語り手の「僕」

が対峙していたと思われるものについて明らかにしたい。三十七歳の「僕」はおそらく、〈緑との過去〉を思い起こさせる何かとの再会を通じて、この物語を語り始めてもいたのだ。

## 二

さて、一九七〇年の十月という物語末尾の時間から、三十七歳の「僕」がこの物語を語り始めるまでの空白については、すでに多くの議論がなされてきた。そして、この議論の中心的な話題となっていたのが、三十七歳の「僕」は現在も緑と共にあるのかどうかということだった。徳永直彰は「やれやれ、またドイツか」からは、ドイツと繋がりをもつ緑と共に生きて久しいことを示しているのではないかと述べ、「緑はワタナベと共にいることで、死への接近を先送りにし続けているのだ」と論じている<sup>(2)</sup>。しかし、緑は果たして現在もお、三十七歳の「僕」と共に生きているのであろうか。

この話題に触れた徳永以前のほとんどの論考は、ほぼ一貫して三十七歳の「僕」と緑との共生について疑問視していた<sup>(3)</sup>。例えば吉田春生は、「僕」が「ドイツ人のスチュワードス」に返答した「ちよっ

と哀しくなっただけだから (I only felt lonely)」という言葉に注目し、「lonely」という単語から、「僕」が一人身であることを示唆している<sup>(4)</sup>。だが、テキストに直接表されていない以上、緑が三十七歳の「僕」の隣にいるのかいないのか、断言することは適わない。「僕」はそのことに關して沈黙を守り続けているのだ。しかしながら、吉田などの指摘から本稿も、三十七歳の「僕」は緑と共に生きてはおらず、一人身であるとの立場を取りたい。彼は緑を失ってしまったのではないだろうか。さらに、この「失ってしまった」とは単なる比喻ではない。おそらく「僕」は、緑を亡くしてしまっているのだ。

緑の死について、ここでは酒井英行の説に準じることから論じていこう<sup>(5)</sup>。酒井は「ハツミさんに通底する緑」としながら彼女の死を、自殺してしまつたハツミに重ね合わせ述べている。次いで論者も同様に、『ノルウェイの森』におけるハツミの死とは、緑の死が投影されたものとして意味付けられるのではないかと考えるのだ。三十七歳の「僕」は緑の死を、ハツミの死によつて暗示しているのではないだろうか。

緑とハツミが共に有していたのは、酒井も指摘するように、〈待つ女〉としての〈女性〉性であろう。

一見すると緑は、そうした〈女性〉性とは無縁の、ある種の奔放な女性として受容されてしまう。緑は性に対する自身の好奇心を露わにし、政治集会の性差別に対して苦言を呈したりするなど、〈新しい女〉としての一面を垣間見せている。だがその一方で、彼女は「偏狭でファシスト」な「彼」を持ち、父親の看病を献身的に行うなど、〈家〉的なものに絡め取られた〈女性〉としても表されているのだ。このように〈女性〉的な緑は、「僕」を食事やデートに誘いはするが、最後の判断を下すことについては、自らの権利を認めていないように思われる。彼女は「僕」の決断を待っているのだ。緑の、こうした〈待つ女〉としての一面は、「たぶんあまりに長く待ちすぎたせいね」(第四章)という彼女の言葉にも表されているが、次の一節にも窺い見ることができよう。

「ねえ、私は生身の血のかよつた女の子なのよ」と緑は僕の首に頬を押しつけて言つた。「そして私はあなたに抱かれて、あなたのことを好きだつてうちあけているのよ。あなたがこうしろつて言えば私なんだから正直でいい子だし、よく働くし、顔だつてけつこう可愛いし、おっぱいだつて良い

かたちしているし、料理もうまいし、お父さんの遺産だって信託預金にしてあるし、大安売りだと思わない？ あなたが取らないと私そのうちどこかよそに行っちゃうわよ」(第十章)

緑は「僕」に精一杯、愛していることを告げている。ところが緑は、この愛の主導権を「僕」に委ねるばかりなのだ。それは〈家〉的な価値観を有している〈女性〉的な緑が、「僕」という男性との関係において主体性を発揮し合う対等な存在として向き合っていないかったことに由来する。このような彼女の性向は、「あなたがこうしろって言えば私なんだってするわよ」という言葉によっても端的に表されているだろう。だからこそ緑は、煮え切らない「僕」に対して、「いいわよ、待ってあげる。あなたのことを信頼してるから」と言うことしかできなかったのではないか。

以上のように男性の、一種の女性幻想や女性規範を内面化している〈女らしい〉緑は、同様に〈女らしい〉ハツミと通じ合うのではないか。ハツミは自身を「馬鹿で古風な女」であると認めていた。

「でもね、ワタナベ君。私はそんなに頭の良い

女じゃないのよ。私はどっちゃかっていうと馬鹿で古風な女なの。システムとか責任とか、そんなことどうだっていいの。結婚して、好きな人に毎晩抱かれて、子供を産めればそれでいいのよ。それだけの。私が求めているのはそれだけなのよ」(第八章)

「結婚して、好きな人に毎晩抱かれて、子供を産めればそれでいい」というハツミの述べる「古風な女」とは、男性に従属する受け身の存在として解釈されるだろう。すなわち、この〈女性〉性において彼女たちは重なり合っているのだ。

しかしハツミは、自身が内面化しているこうした〈女性〉性が仇となって死に追いやられてしまう。つまり「結婚して、好きな人に毎晩抱かれて、子供を産めればそれでいい」という唯一の望みが、彼女の愛する永沢に受け容れられなかったことで、ハツミは自殺という道を選んでしまうのである。一方、緑は「これ以上傷つきたくないの。幸せになりたいのよ」と「僕」に訴えていた。このような訴えからは緑の、自身の願いが受け容れられないことを通じて、「僕」に傷つけられるのを恐れていた様子が読み取れる。だが、懇願とも受け取れる彼女の願いは、

「僕」によつて叶えられなかったのではないだろうか。例えば「僕」は直子の死後、緑に「今は何も言えない」という「短かい手紙」だけを残して、ほとんど何も告げずに彼女の元から去つてしまふ。吉田は「こうした一連の「僕」の行動は、緑自身の「傷つけることだけはやめてね」という嘆願を、何かの成り行きで裏切るのではないかとこの予感を抱かせる」と述べている<sup>(6)</sup>。論者もこの指摘に首肯したい。ここには緑が、「僕」によつて傷つけられることの暗示が忍び込んでいたのだ。

そして、「あなたが取らないと私そのうちどこかよそに行つちやうわよ」と述べられていたように、「僕」によつて傷つけられた緑は「どこかよそ」、すなわち「生」の向こう側へと行つてしまったのではないだろうか。彼女は言つていた、「死ぬこと自体はちつとも怖くないわよ」と。「怖いのは——中略——ゆつくりとゆつくりと死の影が生命の領域を侵食して、気がついたらうす暗くて何も見えなくなつていて、まわりの人のも私のことを生者よりは死者に近いと考えているような、そういう状況なの」だと(第四章)。おそらく、緑にとつては愛されることこそが「生」の証だったのだらう。そう仮定することができるのなら、「僕」に、自身の愛を受け容れられなかった緑は、

裏切られたそのことによつて、自殺に追いやられてしまつたのではないか。

このように、緑の死をも孕んでいた物語に対して酒井は、『ノルウェイの森』という作品は、奇妙に歪んだ作品だと言わざるを得ない。「鉄板みたいに無神経」な「僕」によつて、直子と緑という二人の女性が自殺していきながら(——中略——)、三十七歳の現在の「僕」は、直子を失つた喪失感・悲しみだけを語り出しているのである。不均衡で、グロテスクに歪んだ回想と言わざるを得ない」と述べている<sup>(7)</sup>。だが果たして、『ノルウェイの森』とは「グロテスクに歪んだ回想」なのだろうか。そうは思われない。この物語は緑の記憶からも発していたのである。次節ではそのことについて検討していこう。

### 三

改めて、なぜ「僕」は物語を語り始めたのか。この問題を検証するためには、物語の冒頭に立ち戻る必要があるだらう。「僕」がここに描かれる記憶を蘇らせたきっかけについては、次のように語られていた。

飛行機が着地を完了すると禁煙のサインが消え、天井のスピーカーから小さな音でBGMが流れはじめた。それはどこかのオーケストラが甘く演奏するビートルズの「ノルウェイの森」だった。そしてそのメロディーはいつものように僕を混乱させた。いや、いつもとは比べものにならないくらい激しく僕を混乱させ揺り動かした。(第一章)(傍線引用者)

確かにこの物語は、三十七歳の「僕」が「ノルウェイの森」を聞いて混乱し、記憶を蘇らせることによって回想されている。しかし「僕」は、「ノルウェイの森」を聞くことによっては、過去を想起し始めたのであろうか。

ここで注目したいのが、先の引用に付した傍線部分の言葉たちである。「いつものように」という言葉から「僕」は、「ノルウェイの森」を聴くと「いつも」、つまり恒常的に混乱してしまうということが読み取れるだろう。こうしたいつもの混乱が、どの程度のものであったのかは、テキストから推し量ることができない。だが、「僕」を恒常的に混乱させている「ノルウェイの森」のメロディーが、ここでは「いつもとは比べものにならないくらい激しく」「僕」を揺り

動かしていることに注目すべきではないか。この「いつもとは比べものにならないくらい激しい混乱が」「僕」に、突発的な記憶の想起―フラッシュバックをもたらしただ。

ところで、「僕」にこのようなフラッシュバックをもたらしただ要因とは、一体何であったのか。その要因は「ドイツ」に求められはしないか。

「僕」が「ノルウェイの森」を聞いたのは、ドイツに着地した飛行機の中でのことだった。「僕」はこの時、ドイツを訪れようとしていたのである。また、このドイツへの来訪とは、「僕」にとってあまり好ましいものではなかったようなのだ。

僕は三十七歳で、そのときボーイング747のシートに座っていた。その巨大な飛行機はぶ厚い雨雲をくぐり抜けて降下し、ハンブルク空港に着陸しようとしているところだった。十一月の冷やかな雨が大地を暗く染め、雨合羽を着た整備工たちや、のつぺりとした空港ビルの上に立った旗や、BMWの広告板やそんな何もかもをフランドル派の陰うつな絵の背景のように見せていた。やれやれ、またドイツか、と僕は思った。(第一章)(傍線引用者)

「また」という言葉からは「僕」が、これまでもドイツと関わりを持っていたことが窺える。だが、「ノルウェーの森」のメロディーが、この時の「僕」を「いつもとは比べものにならないくらい激しく」

混乱させていることから想像するに、ここでのドイツ来訪とはおそらく、特別な意味を有していたのだと思われる。ドイツに到着した「僕」には、何か特殊な事態が待ち受けていたのではないか。しかし、その特殊な事態とは、永沢との再会ではなかったか。

永沢は東大を卒業後、外務省に入省することが決まっていた。永沢自身の言葉によれば、入省後「最初の一年間は国内研修」で、「それから当分は外国にやられる」のだという。そしてその「外国」が、永沢にとってはドイツであったのだ。このことは永沢が、ハツミの死を知らせる手紙を「僕」に、ドイツの「ボン」から送ってきたことから推定される。永沢はハツミが自殺する四年前にドイツに行き、少なくとも彼女の死まで四年間はドイツにいたのだ。

しかしながら、ハツミの死から三十七歳の「僕」が立っている語りの現在までには、およそ一〇年以上の隔たりがあり、この時の「僕」のドイツ来訪時点において、永沢が未だドイツに滞在していたのか

どうか、そのことを証明する手立てはない。ところが、テキストが永沢の声を借りて暗示し続けているのは、「僕」と永沢との再会なのである。

「なあ、ワタナベ」と食事が終わってから永沢さんは僕に言った。「俺とお前はここを出て十年だか二十年だか経ってからまたどこかで出会いそうな気がするんだ。そして何かのかたちでかわりあいそうな気がするんだ」

「まるでディッケンズの小説みたいな話ですね」と言って僕は笑った。

「そうだな」と彼も笑った。「でも俺の予感ってよく当たるんだぜ」(第四章)

さらに永沢は、第十章における「僕」との別れの際に、「でも前にいつか言ったように、ずっと先に變なところでひょっとお前に会いそうな気がするんだ」と告げていた。三十七歳の「僕」が飛行機に乗っていた「そのとき」とは、永沢が物語において予言をした当時の年月から数えて、およそ二〇年を経過しており、「十年だか二十年だか経ってから」というテキストが暗示する再会の時期と合致している。要するに「僕」と永沢は、その予言通り、ドイツにおい

て再び見えることになっていたのではないか。そしてこのことが、「僕」に「やれやれ」と嘆息させる原因になっていたのだらう。

しかしなぜ「僕」は、永沢との再会を憂鬱に感じていたのか。それは「僕」が永沢に、自分自身の「負」の側面、換言すれば愛する人を自殺に追いやってしまった過去を投影していたからに他ならない。おそらく永沢は、この物語において、「僕」の〈影〉を背負わされていたのである。

#### 四

周知のように〈影〉(shadow)とは、心理学者C・G・ユングが提唱した元型の一つであり、この概念は、ある個人における文字通りの「暗い影の部分」を成すものとして知られている。つまり〈影〉とは、その人にとっての「負」や「悪」を纏ったものとして立ち現われる。

ところで永沢は、ハツミを自殺に追いやった者として、『ノルウェーの森』に描かれていた。

永沢さんにも僕にも彼女を救うことはできなかった。ハツミさんは――多くの僕の知りあいがそうし

たように――人生のある段階が来ると、ふと思いついたみたいに自らの生命を絶った。彼女は永沢さんがドイツに行ってしまった二年後に他の男と結婚し、その二年後に剃刀で手首を切った。

彼女の死を僕に知らせてくれたのはもちろん永沢さんだった。彼はボンから僕に手紙を書いてきた。「ハツミの死によって何かが消えてしまったし、それはたまらなく哀しく辛いことだ。この僕にとつてさえも」僕はその手紙を破り捨て、もう二度と彼には手紙を書かなかった。(第八章)

「手紙を破り捨て、もう二度と彼には手紙を書かなかった」ことから、「僕」が永沢を、ハツミを死に追いやった張本人であると認めていることが窺える。つまり三十七歳の「僕」は、こうした永沢の姿に己の〈影〉を投影し、彼とハツミとの関係に自分と縁とを重ね合わせていたのではないだろうか。したがって永沢と出会うということは、縁との過去を思い出すことに繋がるのだ。「僕」は永沢という〈影〉と再会することを通じて、自身が犯してしまった罪と向き合い、この物語を語り始めていたのである。しかし語り手の「僕」は、この物語を直子の物語として語ること、自分の犯してしまった過ちを覆い



隠そうとしている。それは「僕」が、直子の死よりも緑の死に対して、その責任を強く感じ取っているからに他ならない。

直子の死に関しては、確かに「僕」にもその一因が認められるだろう。だが緑が自殺したとして、その責任は「僕」に、直子の死によって課されたものよりもずっと重く、直接的にのしかかっていたのではないか。すなわち「僕」は、そのことを意識化しているからこそ、罪悪感から、緑の死の物語として『ノルウェイの森』を描くことができなかったのである。ところがその裏には、やはり緑への鎮魂が込められてもいた。「僕」は物語を通じて、緑を死に追いやってしまった自分自身の〈影〉と対峙し、己の過去と向き合っているのだ。しかしながら、そのようにして臨んだ『ノルウェイの森』という物語において、繰り返し響いているのは、永沢という〈影〉の、呪いのような皮肉な囁き声である。

「俺とワタナベには似ているところがあるんだよ」と永沢さんは言った。「ワタナベも俺と同じように本質的には自分のことにしか興味が持てない人間なんだよ。傲慢か傲慢じゃないかの差こそあれね。自分が何を考え、自分が何を感じ、自分が

どう行動するか、そういうことにしか興味が持てないんだよ」(第八章)

加えて永沢は、「でもワタナベだって殆んど同じだよ、俺と。親切でやさしい男だけど、心の底から誰かを愛することはできない。いつもどこか覚めていて、そしてただ渴きがあるだけなんだ。俺にはそれがわかるんだ」と囁きかける(第八章)。

「僕」は緑を死に追いやってしまった過去を清算するためにも、この物語を語り始めていた。それにも関わらず、物語の隙間から漏れ響いてくるのは、こうした永沢の「僕」を自分と同化してしまおうとする声であり、ここで「僕」は〈影〉としての永沢に呑み込まれそうになっている。自分も「心の底から誰かを愛することはできない」のではないかと。「僕」はこれらの言葉に必死に抗い、抵抗しようとするのであるが、抵抗するが故に、もう一つの人格でもある自分自身の〈影〉を認め、受け容れることができない。そのことが「僕」を混乱に導き、アイデンティティの危機に陥らせてしまうのだ。

「僕」は最後にこう訴えかけている。

僕は緑に電話をかけ、君とどうしても話がした

いんだ。話すことがいっぱいある。話さなくちゃいけないことがいっぱいある。世界中に君以外に求めるものは何もない。君と会って話したい。何もかもを君と二人で最初から始めたい、と言った。  
(第十一章)

ここで「僕」が話したかったことは、緑への償いであり、「僕」は彼女に謝りたかったのではないだろうか。「話すことがいっぱいある。話さなくちやいけないことがいっぱいある」と。そして、「世界中に君以外に求めるものは何もない。君と会って話したい。何もかもを君と二人で最初から始めたい」(傍点引用者)という語り手の、三十七歳の「僕」の言葉としても受け取ることができるその訴えには、失ってしまった緑に対する後悔や、自責の念が込められてもいるようなのだ。

「僕」は、緑に向けても物語を綴っていた。それはこの物語が、ドイツで「僕」と永沢が再会することとを発端として語り始められたことから窺われる。「僕」は永沢に己の〈影〉を投影し、〈緑との過去〉を想起したのだろう。しかしこの〈影〉の内容とは、永沢がハツミを自殺に追いやってしまったことから浮かび上がってくる。「僕」も永沢同様に、「自

分の世界に閉じこも」ることで、ハツミと通じ合う〈女らしい〉緑を自殺に追いやってしまったのではないか。その意味で永沢は、「僕」の記憶の奥底に沈む、緑の自殺という過去を喚起する。永沢と向き合うということは、緑の自殺と向き合うことに繋がるのだ。つまり永沢とは、緑を自殺に追いやってしまった「僕」の〈影〉と通底する存在であつたと考えられる。「僕」はおそらく、永沢に内在する自分自身の〈影〉と向き合うために、物語を語っていたのである。

## 注

(1) 「手記としての『ノルウェイの森』」、一九九二・二、「昭和文学研究」。他に今井清人『「ノルウェイの森」論』(一九八九・一〇、「文研論集」)や石原千秋『「ノルウェイの森」』(二〇〇七・一二、『謎とき 村上春樹』所収、光文社新書)などにも、同様の指摘が見られる。

(2) 「緑に向かって―『ノルウェイの森』の女たち」、二〇〇八・九、「埼玉大学紀要(教養学部)」。

(3) 例えば黒古一夫(「喪失」、もしくは〈恋愛〉の物語―『ノルウェイの森』(一九八九・一二、『村上春樹

―ザ・ロストワールド』所収、六興出版）や木股前掲論文（1）、山根由美恵「村上春樹『ノルウェイの森』論―「緑」への手記―」（二〇〇二・一二、「近代文学試論」）など。またその後の論文として、小島基洋「村上春樹『ノルウェイの森』論―「フランス語の動詞表」と「ドイツ語の文法表」をめぐって」（二〇〇八・一〇、「札幌大学総合論叢」）なども同様の立場を取っている。

（4）「非「恋愛小説」としての『ノルウェイの森』」、一九九七・一一、『村上春樹、転換する』所収、彩流社。

（5）「村上春樹・『ノルウェイの森』論（Ⅱ）」、二〇〇三・七、「人文論集」。他に千石英世「アイロンをかける青年―『ノルウェイの森』のなかで―」（一九八八・一一、「群像」）などが緑の死について示唆している。また徳永前掲論文（2）も、緑に潜在する「死の影」について認めていた。

（6）（4）と同。

（7）酒井前掲論文（5）。